氏　　名	和田（ワダ）　ちはる
学位の種類	博　士　（音楽学）
学位記番号	博　音　第 176 号
学位授与年月日	平成22年 3 月25日
学位論文等題目	〈論文〉音楽にモンタージュされた過去　－晚年のオーケストラ付き声楽作品に見るハンス・アイスラーの芸術観－
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学　教　授　（音楽学部）　大　角　欣　矢
（副査）	〃　〃　（　〃　）　片　山　千佳子
（〃）	〃　〃　（　〃　）　檜　山　哲　彦
（〃）	東京大学　〃　（大学院総合文化研究科）　長　木　誠　司

（論文内容の要旨）

本論文では、晚年の６年間に作曲された３つのオーケストラ付き声楽作品《クーヤン・ブラクのじゅうたん職工たちDie Teppichweber von Kujan-Bulak》（1957）、《『戦争案内』からの情景Bilder aus “Kriegsfibel”》（1957）、《厳粛な歌 Ernste Gesänge》（1962）の分析をとおして、ハンス・アイスラーHanns Eisler（1898－1962）のこの時期の創作姿勢についての包括的な考察を試みる。

ここには二つの目標がある。ひとつは、これらの作品とドイツ民主共和国の芸術政策およびソヴィエト・東ヨーロッパ圏の美学的な規範との関係を問うことを通して、この時期のアイスラーの歴史や社会とのかかわり方を明らかにしようとするものであり、もうひとつは、音楽的な手法とそこにみられる作曲家個人の美学に焦点を当て、彼の創作活動全体の中でのこれらの作品の位置づけについて考えることである。しかし実際には、その過程はしばしば不可分に重なり合っている。

社会主義諸国において文化政策上の基本概念であった「社会主義リアリズム」は、美学的な概念であると同時に、政治的な概念でもあった。その対義語としての「フォルマリズム」と同様、これは結局公式の具体的な定義をもたずじまいであったが、にもかかわらず、作品の評価に際する影響力は極めて大きかった。そのため本論文ではまず、アイスラーの戦後の創作活動の公的な評価基準であったこの概念の、成立事情とその初期の状況とを確認することからはじめる。

これに1956年に急逝した、友人ベルトルト・ブレヒトBertolt Brechtへのオマージュともいえる1957年の２作品の分析が続く。そこではアイスラーのこの時期の創作上の特徴と、作品中への歴史的な問題意識の反映を具体的に見ることができる。さらに、この２作品の背後にある社会情勢や、アイスラーのその当時の活動状況を知るために、政策とのかかわりや歴史的な状況との関連を踏まえてその前後の出来事を整理した。戦後のアイスラーにとって大きな転機となったのは、自作のオペラ台本をめぐる「ファウストゥス論争」と呼ばれる論争である。この台本は「フォルマリズム」として断罪されたが、ここで彼がそれまで試行錯誤をしながらも目指してきた理想と、現実の政策との乖離が明らかになる。また、その後の創作活動には、いわゆる「雪解け」と東西間の緊張の高まりの同時進行が複雑に作用している。1950年代後半には、亡命中に書かれた十二音作品が初演され、それらを含めた彼の作品集の出版が実現する一方で、そのシェーンベルクへの賛辞は論争を呼び、アイスラー自身への不信もたびたび表明された。これらはすべて、晚年の創作活動の評価には欠くことのできない要素である。

その次に遺作となった《厳粛な歌》（1962）を扱う。この作品はその遺書的な性格をしばしば指摘されるが、それはここに、様々な時期の作品や手法が直接または間接的に組み込まれ、ひとつの意味付けの

もとに再構成されているからである。ここに織り込まれているのはアイスラーの創作史上の過去であり、同時にこの作曲家が経験してきた現実の歴史でもある。その意味でこの作品は戦前の労働運動歌とはまた別の、歴史と社会に対するまさに「真面目なernst」取り組みであった。

最終章では上記の分析と歴史的な考察を踏まえ、さまざまなレベルでのモンタージュとしてのこれらの作品のもつ姿勢について考察する。ここで扱った３作品はいずれもブレヒトの死以降に書かれたものであるが、それでもここには、ブレヒトとの長い時期にわたる共同制作の成果が確実に刻みこまれている。そのことをふまえたうえで、ここではまず先に扱った２作品を中心に、闘争歌や教育劇をはじめとする戦前の創作活動の痕跡をたどり、続いて、とりわけ《厳粛な歌》に多く見られる映画音楽に由来する要素に注目して、そこからくみ取ることのできる作曲家の思想と意識について考える。この時期、アイスラーはかつてのように率直な形で、政治や歴史について自らの意見を述べることはほとんどなかった。しかしこれらの作品に組み込まれた多くの要素と、《厳粛な歌》の作曲と並行して行われたハンス・ブンゲとの対話からは、この作曲家の、時代や社会に対する多くの具体的な見解や芸術観を知ることができる。

最後に考察するのはこのモンタージュそのものの意味である。これらの作品に現れていた直接的、また間接的なモンタージュとしてのさまざまな過去は、矛盾や問題をそれと分かる形で内包することをとおして、全体として新たな姿へと構築しなおされている。それは確かに未来へと向かうものである。そこでは葛藤や問題意識は保持されており、矛盾を覆い隠すのではなくすべて掘り起こして陳列することによってのみ、それらを乗り越えるための道が開かれる。それこそ、アイスラーが社会に対する芸術家の使命とみなしたものであった。それまでの彼の活動を部分的に修正しつつ引き継いでいるこれらの作品は、先へと向けられる視線のうちに希望の萌芽を含んでいる。

（総合審査結果の要旨）

本学位神聖論文は、これまで充分に論じられて来なかったハンス・アイスラー（1898－1962）の晩年における活動と作品に光を当て、緻密な資料調査と詳細な作品分析を通じてその意味を問い直す試みである。著者は、「体制への迎合」、あるいは「政治的抑圧の犠牲者」といった、従来なされがちであった紋切り型の評価に代わり、アイスラーが時代の潮流に揉まれつつも、自らの考える芸術家の社会的使命をいかに一貫して果し続けたかを、歴史的資料に即して明らかにし、これまでにない新たなアイスラー像を打ち立てることに成功した。また特に、《クーヤン・ブラクのじゅうたん職工たち》(1957)、《『戦争案内』からの情景》(1957)、《厳粛な歌》(1962) という後期の三つのオーケストラ付声楽作品に関し、成立事情やその背景に関する新たな知見を視野に入れつつ、独自の楽曲やテクストの分析／解釈を通じて初めて納得のゆく作品論を展開し、アイスラーの創作史の中に位置づけたことの意義は大きい。

第一章「社会的リアリズムとフォルマリズム」で第二次世界大戦におけるドイツ民主共和国の文化政策が孕む問題性を浮き彫りにした後、第二章「ブレヒトの死とオマージュ作品」で1957年の上記二作品を取り上げ、ブレヒトとの関係がアイスラーの創作活動において持つ意味を確認した。第三章「変動する時代と社会的背景、その影響」では、アメリカ亡命時代まで遡ってアイスラーの足取りを検証するとともに、「ファウストゥス論争」(1953) 及びそれ以降におけるアイスラーと政治体制との微妙な関係に光を当てた。第四章「遺作《厳粛な歌》」で、この理解が難しい最晩年の連作の分析を行った後、第五章「モンタージュ」において、全体を総括する形で、E.ブロッホの「媒介的モンタージュ」という概念を援用しつつ、「過去についての熟考」を通して過去を生産的に乗り越え、未来の可能性を浮かび上がらせるアイスラーの芸術観と、その手法を用いた彼の芸術的取り組みの実像を明るみに出した。

論述は、大量の一次資料を駆使して手堅く進められているが、一方であまりに作者の個人的意図の読解に終始した感は否めず、アイスラー作品が受容のコンテクストにおいて持ちうる意味作用といった、

より客観的な視座からの考察を今後の課題として残した。また、とりわけ「モンタージュ」手法が実作品（特に《厳粛な歌》）においていかなる機能を果たし、どのような効果を及ぼしているかについては、さらに詳細かつ具体的な考察が必要であろう。

こうした、なお今後の研究を待つべき点はあるにせよ、本論文はアイスラーという一人の芸術家の人物像の評価において、従来の研究にはなかった独自の視点を採り入れ、独創的な学術的成果を挙げた点で優れており、博士の学位を授与するに値すると判断する。